

# ソロバンの語原に關する 新説の批判(二)

三上 義夫

次に日本の文献に就いて檢して見るに、毛利重能の算書（元和八年、1622）並に吉田光由の「塵劫記」（寛永四年、1627）には算盤とも珠盤とも記してない。前田利家遺品の算盤は、前田侯爵家第一の寶物中の一品として

此算盤者。高德公携ニ乎肥州名護屋。其後與ニ春好院。春好院及ニ卒年。賜ニ之侍女今井。諭以下手澤之存。不レ可レ忽諸。一日今井。述ニ往時之趣。進ニ之左右。仍收ニ之篋笥一云。

元祿戊辰臘月三日。

右之通ニ而可レ有ニ御座一候哉以上。

十二月三日。 室 新介。

小關又四郎。

て珍藏されて居るが、之に關して室新介、小關又四郎兩人起草の案文が現存し、傍記の如く記す。

此文書は少し説明を要する。高德公は利家であり、春好院は利家の娘で、利家が豊公征韓役の際に肥前名護屋に滞陣中の携帯品であつたのを娘の手を経て娘の侍女今井の

有に歸したのを、今井から加州侯へ返納したので、侯は其旨を記るして置く爲めに、室鳩巢等に其案文の起草を命じたところ、此案文が出来て差出したのが、案文のまゝに保存されたのである。此案文に珠盤とはなくして算盤とあるのは、算盤の名稱で通じて居たことを示めす。

中村惕齋編の「訓蒙圖彙」（寛文丙午序、1766）には卷八に算と云ふ條があり、算木と梁上一珠の「ソロバン」の圖が見え、且つ算竿並同。算籌（さんちう）、俗云さんぎ。算盤（さんばん）、俗名そろばん。と記るされて居る。こゝにも珠盤とはなくして算盤とある。此記載は寛文

六年の頃に梁上一珠の算盤の存在したことを、極めて明瞭に物語る。

「倭漢三才圖會」は寺島良安編、正徳三年（1713）の序があり、其卷十五に「算盤」と「算木」との圖があり、「算盤」は言ふまでもなく、「ソロバン」の事で、且つ傍記の記載がある。「名物六帖」は正徳甲午歲（1714）五月伊藤長胤序があり、享保乙巳（1725）新鐫であるが、第三帖に

算盤（會呂） 算盤（會呂） 設ニ木盤一 彈レ玉。以代ニ算木一。其珠用ニ狗骨（ヒラキ）樹及梅木一爲レ佳。尋常爲ニ因歸一。捷易之器一也。但如ニ三乘以上法式一難レ解耳。

算盤（ソロバン）、宋謝察微算經。○算盤珠、輟耕錄、凡納婢僕……と見える。此書には「宋謝察微算經」に算盤に關する記載のあることを注意したものである。謝察微の算經は「新唐書」並に「宋史」の藝文志に其名を見るが「說郛」等の叢書類に其斷簡が収録されて居るに過ぎぬ。而も目錄には別書名が見え、如何なる程度に信用すべきやは、誠に疑問である。

山岡俊明の「類聚品彙」卷百九十二にも、「算盤珠そろばん」の條があり「輟耕錄」卷二十九を引用してある。俊明は明和頃の人物である。綠橋荒井先生編次、安政元年（1854）序の「事物異名錄」には、「算盤」へ「ソロバン」と傍訓し、「晋書」の「牙籌」を之に當てる。勿論、此見解は失當ではあるが、而も算盤の名稱を使用したものの一例となる。

前に引用した「松屋筆記」所載の「雍州府志」卷七の土産門にも、算盤、倭俗謂十露盤、凡算盤……とありて、矢張り珠盤とはない。又同書の援引に據るに、マタ惠空が節用大全ノ卷ノ會ノ部（器財門）ニ、算盤ソロバントアレバ……

と見え、延寶八年（1680）に門弟子が校合刊行したとの割註がある。「算盤來歴考補遺」（頁 191）には江州大津算盤屋片岡庄兵衛家家寶の古算盤に就いて、同家の傳來書を吟味すると、

慶長十七年明人長崎に来る者算盤を携帶す、先祖庄兵衛長崎奉行谷川左兵衛に附屬して出張中之を見て奉行に申稟し、明人に就て算盤製造の法を授かり、歸郷後製造して幕府に献ず、幕府勘定所御用調進を命じ……

とある點を記する。又大阪住友家二代良入愛用の古算盤に就いては、其箱書に

此の算盤は良入公御所持也、元和九亥年十七歳にて御下向、夫より四十年間御枕にしたまふ也、我等十一歳之九月に入貞公より被下之候、其方に讓候、永家寶可被致者也。

元文二年巳七月十六日

今年及百十五年。

武 朝。

龜 十 郎 殿。

とあり(頁 194)、「長崎見聞録」(實は長崎見聞録)卷二(寛政十二年版)には、唐人の風俗を説明して、

算盤を見るに、盤粒を貫きたる串、至つて長く製たり、爰をもつて盤粒往來の間長きゆへ、日本の如く早算、置がたし、彼地の人強て急迫する意なければなり。

と説く(頁 201)。更に文政七年(1824)版の「江戸買物獨案内」に、淺草諏訪町十露盤屋吉澤惣兵衛の廣告として

長崎流算盤丸びこ入之儀は手前より仕出し……御勘定所向溜箱入御算盤並に二つの折織算盤……

と見えて居る(頁 205)。此等は何れも算盤の文字が用ゐられて居る。

此の如く日本の諸文献に於ても、「松屋筆記」卷七十六に珠盤の稱呼を見る外には、我等の見聞に觸れた限りは悉く算盤とありて、珠盤としたのではない。

上田萬年等編纂の「大字典」(大正六年)の如きは、「算盤そろばん、正しくは算盤」とあるが、珠の條に於ては「珠算、そろばん」とある外に「珠

盤、たまのはち、玉盤」と稱して、珠盤はそろばんとは全く別のものになつて居る。明の范泓の「典籍便覽」及び明の陳仁錫の「潛確居類書」に於ても、同様である。

然らば「松屋筆記」の珠盤は全く一つの例外として見るべきものであらうし、博覽の讀書子であつた松屋與清が、幸か不幸か梅文鼎の「古算器考」に珠盤と言ふのを見出して、其名稱に共鳴し、之を採用したと云ふに過ぎないのではないかとも見られる。

勿論、和算書中には古くは十露盤と書いたものが多く、中期以後になると算顆盤と書いて「ソロバン」と訓んだものであるが、相成るべくは算木の算法を避けて十露盤だけで數的計算を成就し得んことを理想とし、十露盤で出来る術を算顆術と稱したが、算顆術と算顆盤とは其名稱の使用に前後があるや否やに就き、未だ確かめて居らぬ。此等の十露盤又は算顆盤と書く以外に於て、寧ろ算家以外の一般讀書界に於ては、主として算盤の文字が通行したのではないかと、前項の諸文献からも窺はれ得るやうに思ふ。

此事情が既に明かにされた上は、算盤の二字に就いて更に考慮を要する一事がある。即ち「荒木村英先生茶談」に

吉田光由カ門人横川玄悦ト云フアリ、後ニ算盤級聚ノ術ヲ作ル、此術ノ祖ナリ

と見えて居るが、算盤級聚の術とは果して如何なる算法であつたらうか。同書には更に

算學啓蒙ニ依テ級聚ノ術ヲ發明ス、門人星野助右衛門啓蒙註解ヲ作ルとの書添へがあり、「増修日本數學史」(頁106)に、延寶元年(1673)藤田吉勝「算法級聚抄」を著すとあるのは無關係のものではなからうと思はれる。同書(頁 78)に玄悦の算盤級聚術は「其書逸亡シテ留存スルモノナン」とはあるが、「算學級聚抄」に依りて其算法の面影を偲ぶことが出来る。「増修日本數學史」の著者遠藤利貞存生の頃には此書は未だ世に顯は

れなかつたけれども、其後之を發見し得たのは仕合せであつた。私は大正七年五月十八日に淡路由良に於て中村貞明遺藏の「算學級聚抄」を調査したのであるが、其序文に據るに、洛陽大橋氏清行者算勘の達士であり、門弟藤田氏吉勝が偶々「算學啓蒙」の釋鎖門を考試して、赤黒の算木を以て算法を施すこととし、之を名けて算學級聚抄と云ふと述べ、寛文癸丑(1673)西川勝元序としてある。

私は其後越後磐城等に於て「算法指南」を見ることを得たが、天和四年(1684)の序があり、前の「算學級聚抄」の異名本であることを知る。而も大橋清行弟子西川勝基選と署し、西川の自序があるのが、別本とは異なる。其序文を見るに、前二卷は和邦の算盤及漢法の算木を以て云々と説く。算木は支那のもの、算盤は日本のものと心得たのであつたらう。

斯く言ふ算盤は固より普通の算盤とは異なり、「ソロバン」を幾つも重ねて合成した如き形状のものであることは、算法を圖示してある様式に依つて明らかである。而も又

又曰、十露盤ヲ算木ニテ置コト同事也

とありて、此の合成の十露盤の代りに算木を使つても同じ事だと云ふのである。

此の如き記載から見て、十露盤と云ふのも、算盤と云ふのも別のものではない。

此合成の算盤は現に能登七尾の丹後關太郎氏所藏の一面があるが、其合成算盤は左右に四面づゝ都合八面を並置した如きものであり、其左右は夫々整数の部と小数の部とを布列する便宜を提供する。此形制は言ふまでもなく、算木で行ふ算法を之に依つて運用しようと思ふのであるが、其工夫は簡単ながら誠に面白い。

所藏者の家では如何なる用途のものであるかが全く不明であつたが、私は之を尋ねられて算木の代用品であることを告げたのであつた。

此合成算盤、若くは算木代用の算盤とも云ふべきものは、「算學級聚抄」

又は「算法指南」所載の圖式と直接の一致を有するものであり、横川玄悦の算盤級聚の術と云ふのも、又之に關するものであつたらう事は、少しも疑ふ事を要せぬ。

此合成算盤が算盤とも書かれ、十露盤と稱せられたことも、亦甚だ明らかである。さうして此算器の使用からして算木に移るに當つても、算木の盤を同じく算盤と稱しても亦不都合はなかつたであらうし、斯くして算木の盤が算盤と稱せられることになつても、決して不條理ではない。同じ算盤の二字を使つても「サンバン」と音讀するのと、「ソロバン」と訓ずるとの區別が出来ることも亦甚だ自然であつたらう。

算木の盤を算盤と稱することが、我日本に於ても何時頃から始まつたらうかを、私は知らぬ。「ソロバン」が傳來して普及するに及んで算木の使用が一旦中絶し、後に天元術の興起と共に算木が復興したのであつたか、其れとも古來引續いて用ゐられ、一時は「ソロバン」と並び行はれて、其れから天元術にも使はれることになつたのであるか、何うかも、私は知らぬ。其等の消息は之を明らかにしたいと思ふけれども、史料缺乏して知ることが出来ぬ。何とも遺憾の極みである。

けれども「塵劫記」の如きも獨り「ソロバン」の算法のみ教へて、算木の算法には論及されて居らぬことから見ても、算木は一時甚だ衰頹したのであらうことは、容易に想像される。場合に依つては、支那と同じく一時中絶したであらう。

果して然らば算盤の文字は「ソロバン」にのみ適用されて居たので「算學級聚抄」の用例から考へられるやうに、「ソロバン」と同時に算木の盤へも推擴められるやうになつたのではないかと想像される。決して算盤の名稱は本來算木の盤のみの専有であつたらうと考へる譯には行かぬ。此點に就いては強く主張する事は出来ないが、併し此の如き事情も有り得る事だけは、度外視してはならぬ。

上來說き來る所の結果から見るときは、支那でも日本でも珠算の器を算

盤と稱したのは、恐らく元代以來、少くも明代以來は終始一貫して行はれたのであり、後代になつて時に或は珠盤と稱したこともあつたと見るのが當然であらう。「算盤來歴考補遺」に於ては如何なる證左に基づいて、支那では算盤と云ふよりも珠盤と云ふ方が普通だと主張されるのであるかも知らぬけれども、乾隆丙寅（十一年、1746）重刻の「萬寶全書」に算盤と云ふ文字の出てる事を擧げて、

算盤と云ふ文字の起源が此書に始まるや否や、私には未だ穿鑿が及ばない（頁 185）

と述べられて居るのを見ると、上述の如く算盤と云ふ名稱が明代以來多く行はれて居た事實をば注意しないからの推測であることは全く明らかであるし、我等が一瞥して來た結果からは、其主張に賛意を表する事が出来ない。我等は暫く之を度外に置きたい。

斯く考へて來るときは、「ソロバン」と云ふ稱呼が珠盤の轉訛から來たものであらうと云ふ新らしき見解は、全く其根底を失ふべき筈である。單に砂上の樓閣に過ぎない。

「ソロバン」の名稱が文祿年中に存したことは、1595年天草版の拉葡日對譯辭典に soroban と云ふ文字が出て居る事でも判明する。即ち文祿四年に相當する。又 1603年（即ち慶長八年）出版の日葡辭典にも soroban は支那日本の算器であることを言ふ。前者は武藤長藏、故高井計之助兩氏が別々に發見する所に係り、後者は高井の檢索に依つて之を知る。前田利家が名古屋の陣中に算盤を携帯したのは其の直前であるが、而も其算盤は珠形も支那式よりは可なり變化を見る。故に算盤の傳來が更に以前の事であつたのは言ふまでもなく、「ソロバン」と云ふ名稱が辭典作製の頃に普及して居た事も亦勿論である。而も算盤と云ふ稱呼が其頃既に支那で存在した事は、「數學通軌」並に「算法統宗」の所載に據つて確實に立證せられ更に其時代に於て珠盤と云ふ名稱があつたと云ふ證左は全く見出されないものであり、此等の事情を眼中に於て回想するとき、我等は何うしても、珠盤

の名稱を急呼することに依つて、「ソロバン」と云ふ稱呼が発生したのであらうと云ふ新説に同意することは出来ない。それよりも算盤 swan-pan と云ふ支那音を聞きなまつて「ソロバン」に轉訛したものであらうと見る方が、遙かに自然らしく思はれるのである。

若し假に一步を譲つて、否、譲るべからざるを譲つて、珠盤の音が「ソロバン」に訛まつたものとするならば、珠盤と云ふ文字が江戸時代初期から中期に掛けての諸文献の中に多少は現はれさうなものであるが、今多く其事實を見ぬのは、珠盤と云ふ名稱が餘り行はれて居なかつた爲めの結果であつたらう。「藤田貞資が信州竹内度道へ興へた文書に珠盤術の語があり貞資は文化四年（1807）に歿して居るから、「松屋筆記」の記載よりは前のものであらうと思はれるが、併し此種の用例は恐らく多く見ないやうである。和算家のソロバンに関する名稱などの用例に就いては他日の徹底的檢索を期する。」

1595年刊の辭書には、同一算器を日本で san 又は soroban と稱したやうに見えて居るのであるが、「ソロバン」が單に算と稱せられたことは、支那の文献にも日本の文献にも全然所見の無い事である。此事は如何に處理すべきか、誠に窮せざるを得ぬ。支那で古くは算と云へば、算木を指すのであつたが、今此辭書中の算は算木を意味するものとは解せられぬ。何うしても「ソロバン」を指すものでなければならぬ。問題は其記載が正しいものであつたか、若しくは誤傳ではなかつたかと云ふ所に係る。果して誤傳が有るとすれば、san とは即ち san-ban を誤つたのであり、其頃既に文字通り算盤を音讀する風習もあつたと認められる。此見解が許されるならば、語音の上では「サンバン」と云ふよりも「ソロバン」と云ふ方が勝を占めて一般に行はれることになつたが、文語としては算盤の二字が其頃から既に用ゐられて、後代までも繼續した事を物語る。

文祿年中の頃に「ソロバン」を單に算とも稱したことがあつたと見るか、其れとも算盤を音讀したこともあつたと見るべきか、其兩者の何れが

正しいかは、容易に判断し難いけれども、後の方が寧ろ事實に近いのではないかと、私は想像する。

斯く解することは、前後の関係を圓滑に接續進行せしめるものである。

以上は唯「ソロバン」と云ふ語源に関する所見に止まり、「算盤來歴考補遺」中に於ける自餘の見解に就いても、固より論すべきものはあるが、今姑く其検討を保留して置く。(完)

昭和十一年九月七日

〔附記〕 前記辭書中の解説に就いては、某君より注意もあつたが、何れ更に調査して正確に取調べて見たい積りである。

### 珠算上達算歌 川村貫治

運ぶ珠正しくすれば自ら指は軌道に沿ふて走らむ  
指先も心も軽く朗かに聲と珠とを睦み合して  
二桁か三桁の數で踏みならし後のいしづ礎固く築かむ  
空を飛ぶ燕の如き急行も發着どきのまるる静けさ  
快くスタートすれば進む途蟠りなく走り通せむ  
躓けばまたつまづくと心得て心亂さず落着いてやれ  
第一に出した答に信を置きそれを基に正否質さむ  
引き算は引き去り終る算なれど裏を返さば加へ足すこと

「珠算は何如にして上達すべきか」より

## 和算漫録(六)

村林專之助

1、極數 極に多少の二數あり。多極とは多きこと無量にして遂に極に至るを云ふ。

譬ば圓幾何大なりと云ふとも、圓規を失ふ理は曾てなし。然りといへども、多極に至ては、其圓周遂に一直線をなす。依て多極は形ち在りといへども、是を量ること能はず。故に虚とす。

評曰、譬ば地は大なる球にして海陸共に皆球面なり。故に地上は其行く所都て圓周なりといへども、平か大なるときは山嶽幽谷の高低を論せずにして直線上を行くが如し。此の如く里數に限りある地球すら圓周直線に等し。況や多極に至ては何んぞ其圓周一直線をなすことを得ざらんや。

少極とは少なきこと無量にして遂に極に至るを云ふ。少極に至ては視るに形ち無く、取るに像ち無し。故に少極は空とす。

多極數を以て少極數を求め、少極數を以て多極數を求るときは左の如し。

$\frac{\text{多極}}{\text{少極}}$  は 少極 也即ち空とす。  $\frac{\text{少極}}{\text{多極}}$  は 多極 也即ち虚とす。

右極は無量の極にして有量の極とは等しからず。有量の極は所謂極形或は適盡法を用ふる容題等に云ふ所の極なり必ず混すべからず。今極數を求る雜問一二を擧て左に示す。

今有原數一十個逐而増六分間極數幾何 但し起千一以上増數則無極數

答曰極數二十五個

解曰 極數 は 原數 増 原數 増 原數 増 原數 増 原數